



## 平成15年度研修の概要(3)

農林水産省本省職員を対象にした経済関係企画職員研修では当誌第9号で紹介した「基礎コース」に加え、今年度から「個別課題コース」を開設し、4課目の講義を実施しました。今回は前号で紹介した2課目（6月～8月実施）に続いて8月～9月に実施した残り2課目の講義内容を担当講師から紹介してもらいました。なお、講義はいずれも当研究所霞が関分室で開講されました。

### 環境評価の経済学 [8月26日～9月16日、全4回、毎週火曜日午前]

従来の経済学では主に市場経済を対象としてきたため、市場メカニズムで説明しにくかった環境について、仮定的な市場を想定することにより実証的に評価する方法（CVM、代替法等）を講義しました。

### フードシステム論 [9月4日～9月25日、全4回、毎週木曜日午前]

最近は、農業を単一産業としてみるだけでなく、川上から川下へ、農業から食品製造業、流通産業、消費者への流れの総体として把握する視点が注目されています。この全体をフードシステムとして把握し、理解することを目的として開講されました。

（清水 純一）

#### 環境評価の経済学

法政大学経済学部助教授 西澤 栄一郎

第1回目は、まず、「1. 環境の経済評価とは？」として、環境の経済的評価がなぜ求められるのか、経済学では環境をどのように分析するのか、ということから始め、費用便益分析について説明しました。続いて、「2. 環境の価値と評価手法の概要」として、環境の価値の種類と評価手法の分類について解説しました。

第2回目は、人々の行動を観察して、環境の価値を導き出す手法である、「3. 旅行費用法」と「4. ヘドニック法」について説明しました。

第3回目は、アンケート調査を行って環境の価値を推計する手法である、「5. CVM（仮想評価法）」と「6. コンジョイント法」について説明しました。それぞれの手法につ

いて、理論や計算方法の詳細には立ち入らずに、わかりやすい研究事例の紹介を中心にお話ししました。

第4回目は、環境の経済的評価手法とは視点を変えた話題を取り上げました。「7. 環境経済統合勘定」では、いわゆるグリーンGDPを計算する枠組みである環境・経済統合勘定(SEEA)と、ヨーロッパで最近作成されている環境勘定を統合した国民経済計算マトリックス(NAMEA)について解説しました。最後の「8. 産業連関分析とLCA(ライフサイクルアセスメント)」でも、実証研究を中心に説明しました。

日常の業務で環境の経済的評価をする必要のある方たちが多数出席され、熱心に聴講してくださいました。ただ、経済学の基本的な概念を、グラフを使って説明したのですが、講師の考え方のせいか、消化不良の方もいたことは反省すべき点です。

## フードシステム論

農林水産政策研究所評価・食料政策部長	薬師寺 哲郎
農林水産政策研究所企画連絡室長	吉田 泰治

第1回目は、「フードシステムの概念」、「飲食費支出とフードシステム」、「食品工業」について説明しました。この中で、飲食費支出の増加に伴うそれぞれの部門の付加価値の増加、それぞれの部門のinputとoutputを考慮した食品工業のタイプ分類とタイプごとの特徴、市場構造とその要因、食品工業の行動原理等についてお話ししました。

第2回目は、「流通業」、「小売業」、「外食産業」、「中食」について説明しました。この中では、近年そのウエイトが増大している流通部門の役割、商業マージン率の動向、流通部門の産出と費用に重点を置いて流通業一般の話をしたあと、小売業の役割と構造、外食産業の構造、近年増加している中食の定義とコンビニの成長等についてお話ししました。

フードシステム論の考え方からすれば、それぞれの主体間の関係に主眼を置いてお話しすべきであったかもしれません、限られた時間の中で、フードシステムの一部分を虫眼鏡で拡大して見るよりは、フードシステムの構成部門全体について鳥瞰図的に見る方が役に立つと考えました。この結果、いわゆる食品産業論に近い説明になりました。

(薬師寺 哲郎)

第3回目は、フードシステムを分析する道具としての「産業連関分析」の基礎概念から話を始め、この方法に特有の直接効果のみならず間接効果をも含む各種経済誘発効果、「飲食費」のフローなどの他、産業連関分析の手法によるフードシステムの自給率の概念と推計結果を話しました。

第4回目は、都道府県の産業連関表によって、各県の経済に占める農林水産業(1次産業)と食品工業(2次産業)が県経済に果たす役割について話しました。1次産業と2次産業のウエイトの相違、産業立地の相違などについて話しました。 (吉田 泰治)